

ハイデガー・フォーラム十周年記念スピーチ

## 存在論の私有化 [Eine Aneignung der Ontologie]

イェー スジョン チェンウオン  
李 洙 正（昌原大学）

「夫 天地者 萬物之逆旅，光陰者 百代之過客。fú tiāndì zhě wànwù zhī nǐlǚ, guāngyīn zhě bǎidài zhī guòkè.」（夫、天地なる者は万物の逆旅にして光陰なる者は百代の過客なり。）  
[凡そ、天地というものは、万物の泊まっていく旅宿のようなものであり、歲月というものは、永遠を旅する旅人のようなものである。] かく李白は詠った。暫く彼に憑依！！

広大無辺の「宇宙空間」を一度本気で、真正面から、考えてみるならば、見当もつかないようなあの大きさ乃至広さの前で我々はただ黙って口を閉じるしかない。我々は一生の間、いな、幾つかの生を繰り返すとしても、その空間の億兆分の一さへも踏んでみる事ができないのであり、その全体の中の塵ほどの大きさにもなれぬこの地球の上で、またその塵の塵ほどの大きさにもなれぬ何十坪、或いは多くて何百坪の面積を自分のものとして持ちうるだけなのである。

無始無終のあの「歲月、光陰」も一度まともに考えてみよう。すると、あの気の遠くなるような長さの前で我々は同じく言語を逸するしかない。いわゆるビッグ・バンからの137億年、いわゆる地球生成からの46億年というものを事実として認めるとしても、それもまた、いわゆる劫の単位から考えてみるならば、ただの瞬間に過ぎないものである。我々はその瞬間の中の瞬間である約80余年、長くて100年の時間を自分のものとして享受しうるだけなのである。

だから「浮生若夢」か。然り！ それに間違いない。しかし！ もう一つそれと同時に確かなのは、その何十坪、その何十年の空間と時間が我々自身である人間たちにとっては、「生の世界」として、そして「生涯」として、「意味」という何かを明らかに構成している、ということである。たとえ「浮世」、「夢」の如きものだとしても、いったい誰がその何十坪とその何十年とを軽く投げ出すことが出来ようや。まさにその大したものでもないものを、あらゆる大したものの中の最も大したものとして掴み取り、あくせくと生を押し進めていくこと、それこそが我々人間の否定することの出来ない実像ではなかったのか。誰とて、これを簡単に無視することは出来ない。「自分のもの」としての時空間はまさにそういうものである。事象そのものの巨大さと自分のものの貧弱さ。それでも尚有

---

<sup>1</sup> 「その人に成り済ましてみること」。これは、哲学的真理を理解し、わがものにするために要求される、有効な解釈学的方法論の一つである。ガダマーの所謂「地平融合」もこの「憑依」において最も忠実な形で可能となる。事象そのものの同一性と、認識構造の同一性 [もしくは理性の普遍性] がその基盤となる。

効な「自分のもの<sup>2</sup>」。「学問」というものもまた然り！

「自分のもの」ということ、その自分のものということが持つ小さな「意味」ということ、それにしばらく考えを巡らしてみたいと思う。

私は1974年から2015年現在まで、約40年の歳月、マルティン・ハイデガーと彼の哲学を私の人生の一部分に置いて生きてきた。考えてみれば、そのお陰で博士となり、大学教授となったのであり、またそのお陰で飯も食っており、しかも皆さんのような素晴らしい同学、仲間と出会い、かくも美しき友情さえも交わしているのだから、実に、誠に、有難いことであると言わないわけにはいかない。40年前、私が初めて接したハイデガーの思惟の世界は、本当に大きくて高い山だったのであり、広くて深い海だったのであり、彼自身も言ったとおり、数多くの小路をもった森だったのであり、そして遥かなる道程、でもあったのである。そのすべてがまた、すくなくとも私には、彼の魅力そのものでもあった。それはまるごと、私の大好きな所謂「作品」の世界に他ならなかった。「哲学」という名の一つの作品！

ところで、なんだかんだ言われるすべての各論を括弧づけて、私に最も印象的に迫ったのは、彼の思惟ないし哲学が総じてただ一つのことには収斂されるということ、つまり「一つの星に向かっていくこと、ただそれのみ」(Auf einen Stern zu gehen, nur dieses)、だということであり、それがすなわち「存在」というこの謎中の謎を指している、ということであった。広げると100巻、畳むと1字！ただひたすらこれを徹底的に考え抜くこと。こういうものこそ哲学[Die Philosophie]ではないか！そう私は受け止めたのである。

その大変な量と質の思惟を集約するたった一つの文字、「存在」(Sein)！それは一体何を言うのであろうか。一体何を指すのであろうか。40年前の私には、それは一つの霧であった。いな、霧の中ですっとかすめる朧な影のようなものであった。では今は？敢えて言わせていただくが、その霧はいつの間にか消え去り、私はその存在の輝く姿をはっきりと、ありありと目にしている。

私は、私が見ている「この存在」がハイデガーの見ていた「あの存在」と違うものではない、と確信する。万が一、彼のそれと私のこれとが違うものであれば、彼の語った存在の「同一性」、ダス・ゼルベ(das Selbe)ということ、そして存在の「恒常性」(das Bleibende)ということは、撤回されねばならないであろう。存在というこの問題的事象(fragwürdige Sache)は、己を顕示する「現象」として、露ならしめられた「真理」として、開示する「アレーティア」として、何時も何処でも「同一なるもの」として、確固としてそこに、一定の唯一なる場所に留まっている。ダイヤモンドよりももっと堅く！変わることなく！正にそうであるからこそ、パルメニデスを初めとするあのフォアゾクラティカーたちの見ていたあの存在が、ハイデガーにも同じ姿で見えることが出来たのである。

---

<sup>2</sup> 「自分のものにする」「我が物にすること」を私はここで敢えて「私有化」と概念化するのだが、これには勿論、如何なる否定的な意味合いも含まれていない。私がこの概念で意味したいのは、ただ、学問における所有権、権利と責任を伴う自己流の思惟、これである。「楽しき学問」のためにも、「現象学的接近」のためにも、こうした私有化は是非とも必要である、と私は考えている。

り、また同じ姿で渡邊二郎にも、そしてイー・スジョンにも見えることができたのである。存在というこの現象が持つ主題としての力は、まさにその点に、つまり時間的 - 空間的普遍性、変わらない不変性、唯一絶対性、そして何よりもそれ自体としての問題性、に、あると言わねばならない。特に古今東西、時間と空間を超越した絶対的普遍性は、存在という現象が纏った神秘の衣である。存在は「同一なものとして同一な所に留まる」(tauton t'en tautoi te menon kath'heauto te keitai choutos empedon authi menei.) といったパルメニデスのあの言葉も正にその点を証言するものにほかならなかった。

青年パルメニデスが女神の口を借りて「ある、ということ」(hopos estin) を語った時、彼は、今私が見ている正に「この」存在を見ていたのである。ライプニッツやヤスパースやハイデガーが、「いったい何故存在者があり、かえって無ではないのか」(Warum ist überhaupt Seiendes und nicht vielmehr Nichts?) と、驚嘆した時、彼らもやはり私の見ている正に「この」存在を見ていたのである。紀元前5世紀のエレアのパルメニデスと20世紀前半のフライブルクのハイデガーと20世紀後半ないし21世紀前半のソウルのイー・スジョンとが、その人種的 - 言語的 - 地理的差異にも拘わらず共有しているこの同一の現象としての存在！ 私はこの絶対的現象の言葉を絶する凄さの前で、ただただ驚愕するのみであった。アリストテレスが彼の『形而上学』において何故「驚異」(thaumazein) ということ口にしたのか、それを了解するのは決して難しいことではなかった。私が自ら感じたその驚異が二千数百年前の彼らが感じたあれと質的に異ならない、ということ私は自信を持って言うことができる。こうした発言が決して自惚れや傲慢不遜や生意気に受け止められんことを私は慎みつつも期待している<sup>3</sup>。

それを前提に私は、私が見た存在の姿を私の言語で私の同学たちに、ちょっとだけ、語らせてもらいたいと思う。(どうかこの発表の一つの目的でもある「Mitdenken」が叶いますように！)

ただし、「存在」というこの語は、相当広い表現の振幅を必要とする。ハイデガーもアリストテレスも既に言っているように、存在というものは、それ自体としてあまりにもその該当範囲が広いので、つまり考えられうる - 語られうるありとあらゆるものが存在であるので、その言語的意味もまた当然多様であるしかない。その点を前もってはっきりし、ご了解を得ておく必要があると私は思う。一見違うもの、或いは違うように見えるもの、をすべて「存在」という語で称しても迷わされないように、紛れないようにしよう、とい

---

<sup>3</sup> 私はその間に、韓国・日本・ドイツ・アメリカで発表してきた論文・著作・新聞コラム、そして講義や講演などにおいて、ハイデガーが論じた諸々の諸概念を、たとえば「存在・時間・現象学・解釈学・解體・基礎存在論・現存在・転向・ハイデガー存在論の形成過程・ハイデガー哲学の構造と性格・思惟・詩作 - 詩人・形而上学・放下・還帰・無・二重態・配定・真理 - 非隠匿性 - アレーティア・ロゴス・フュシス・クレオン・事象・運命 - 'エス・ギープト'・歴史 - 存在史・根拠・事物・世界 - 四方・言語・単純なるもの - 近きもの - 同一なるもの - 古きもの - 恒常なるもの - 偉大なるもの・技術・神・発現(エルアイクニス) …等々」を主題として取り扱って来た。だから、ハイデガーについて、そして「存在」について、何かを語る最小限の資格は具えたのではないだろうか、やはり憚りながらも期待している。

うことである。当初、初めて「存在」を口にしたパルメニデスが「estin」または「eon」と呼んだのは、「ある」ところの、そして「である」ところの、すべての「もの」、そしてすべての「こと」を含む、すべてを包括する、そのようなものであった。（ただし、理解 - 説明 - 伝達の便宜を図るため、幾つかの「存在範疇」（Seinskategorie）ないし「存在領域」（Seinsbereich）を設けるのは悪くないと思われる<sup>4</sup>。）

1) [世界の存在] : そのすべての「もの」、「こと」、すべての「存在」、その中でもまず何より私の哲学的意識を掌握したのは、「この世界」、「この世」という存在であった。この世界とは、ほかならぬ存在の世界、すなわち存在界であった。この存在の世界、存在という世界がかく開かれているということ、現に与えられているということ、存在しているということ！ でんと構えているということ！ この驚くべき事実！ 摩訶不思議な現象！ これのためには、人間の感嘆符など百だつて千だつて決して足りるものではない。孔子も仏陀もソクラテスもイエスも一時存在として留まった正にこの世界！ この唯一で絶対的な世界！ 「無」であることもありえたが、現にそうではなく、かく存在しているこの神秘の「世界」！ これがある、ということ！

2) [時間・空間の存在] : そしてこの世界を縦横に構成している根本的 - 基底的存在条件としての「空間と時間」というもの！ その眩むような広さと長さ！ 李白も正にそれを見ていたのであり、デモクリトスもアウグスティヌスもカント<sup>5</sup>もパスカルも、正にそれを見てあのように驚愕していたのである。それは実に驚くべき実質的存在<sup>6</sup>であった。肉眼には見えねども心眼にははっきりと見える実態！ 我々の先輩哲学者たちが観念や感性もしくは意識の中での空間や時間を語っているからといって、それらがただ人間の中だけに、人間の考えの中だけに存在するものだと、そう思うアホはいないはずである。パルメニデスは既に2500年も前の大昔に「to gar auto noein estin te kai einai」という言葉で、人間の思惟が源泉的に存在と繋がっている、関わっている、絡んでいる、ということをお我々に知らせてくれた<sup>7</sup>。パークリー<sup>8</sup>もそしてブレンターノもフッサールもそれを知らせている。我々の思考 - 観念 - 意識は必ずその相関者である存在そのもの「についての」ものなのである。空間も時間もそのようにそれ自体として延長されており、持続されている。かくも広くそして長く！ 我々は誰とてその空間と時間という存在の始まりと終わりとを決して知ることはできない。如何なる神話も科学もそれについて我々の理性を納得させることは不可能である。永遠に。無知や蛮勇と妥協しない限りは。

3) [存在者の存在] : まさにその空間と時間、すなわち宇宙の中に、数え切れない

<sup>4</sup> 勿論これは、任意のものではなく、現象そのものの「質的差異」によるものである。

<sup>5</sup> „Zwei Dinge erfüllen das Gemüt mit immer neuer und zunehmender Bewunderung und Ehrfurcht, je öfter und anhaltender sich das Nachdenken damit beschäftigt: Der bestirnte Himmel über mir, und das moralische Gesetz in mir.“ — Kant, *Kritik der praktischen Vernunft*

<sup>6</sup> だから、これは当然、「幾何学的空間」や「物理学的時間」とは厳密に区別される。因みに、この「区別」というのも、哲学的混乱を避けるために大変有効な方法論の一つとして私が好むものである。

<sup>7</sup> これを思惟と存在の「根源的相関性」、または「思惟の志向性」と呼んでも良い。

<sup>8</sup> *Esse est percipi*. 知覚だけを唯一の存在として認める、という意味ではなく、「両者の相関性」の指摘として、私はこの命題を解釈する。

ほどの多くて多様な存在者たちが、事物たちが、物質ないし物体として存在している。まず所謂代表的存在者として、気が遠くなる程の多くの星々が、銀河たちが、存在しており、それらの中に我々の知っているこの銀河系というもの、太陽系というものが、そしてその中に水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星…といった星たちが、かくのごとく存在している。そしてその中に一つの小さな星、われらのこの地球があり、そこに我々の知っているこのありとあらゆる具体的事物たち、存在者たち、すなわち所謂万有、森羅万象が、かくのごとく存在しているのである。地・水・火・風<sup>9</sup>をはじめ、諸々の鉱物や植物そして動物たち…。思いをめぐらせば、そのどれ一つ神秘でないものはないのではないか！ 万が一これらがこのように存在しないのならば…。「もし(で)なければ…」私の好む方法論である所謂「欠如假定<sup>10</sup>」をこれらに適用してみれば<sup>11</sup>、誰とてこれらの存在の神秘を即座に承認せざるをえなくなるはずである。ああ、この大変な大事件！ あるものがある、ということ！ これほど多くのものがこれほどにも多様にある、ということ！ 我々が時に「自然」とも呼んでいるこの驚くべき大事件！

4) [存在秩序の存在] : それだけか。いな。これら一つ一つがまた如何に巧妙な存在秩序の中で、定めに沿って、理どおり、ヌースやロゴスに従って、あるいは法則に準じて、動いているかを考えてみよ。太陽というやつはなんと46億年もの間、定まった一箇所に居座って燃え続けながらも減りもせず、光と熱を放出しており、地球というやつは、驚くべきことに、その太陽から実に神妙な距離を離れていて、その熱と光を受け、その表面のありとあらゆる生命たちを育てているではないか！ しかも地球はその丸い表面のすべてのものを、軽重硬軟問わずその中心へと抱き込んでおり、またそれは、そのものすごい重さが信じられないくらい規則正しく己を動かし自転と公転をすることで、朝が来、夕が来る。そのようにして昼夜が巡り、春夏秋冬も循環するのである。まさに「そのようになっている」ということ、「そうなるようにせしめられている」ということ、「そうであり続けている」ということ。これもまた、地球の存在、それにほかならないわけである。まさにその玄妙さ故に孔子は「天何言哉 四時行焉 百物生焉 天何言哉 tiānhéyánzāi sīshíxíngyān bǎiwùshēngyān tiānhéyánzāi」(天、何をか言わんや。四時行われ、百物生ず。天、何をか言わんや)とまで、つまり、四季の運行と万物の生育を天の声なき言語として、解釈したのである。

5) [人間の存在] : そして、その地球の上の百物ないし万物の一つとして、我々自身である人間もまたかく存在しているではないか。こんなにも永く、そしてこんなにも多く！ なんと70億もの人間が！ ああ、この何たる奇しの現象か。この驚くべき「人間」というものが、この驚くべき世界の中で、こんな驚くべき構造と秩序<sup>12</sup>の中で、このよう

<sup>9</sup> 周知の通り、これらはあの最初期の哲学者たちの関心の的であった。

<sup>10</sup> 近さ、多さ、慣れ親しさ故に「当たり前」とされ、その価値が埋もれてしまった、或いは覆い隠されてしまった事柄を改めて浮き彫りにし、再認識させるために、これは、非常に有効な哲学的方法論の一つとなる。所謂「数的表示」「数化」と共に、私はこれを哲学する同学の方々に強くお勧めしたい。

<sup>11</sup> 例えば、サハラ砂漠で水の欠如を、太平洋のど真ん中で地の欠如を、南極で火の欠如を、エベレストの頂上で空気の欠如を假定してみると、その効果は確実なものとなるはずである。

<sup>12</sup> これについての具体的展開の一つが、あのハイデガーの所謂「基礎的存在論」、「現存在分析」

に存在していることは！

ハイデガーも力説したように、人間の存在は人間にとってあまりにも「近きもの」(das Nahe)であるゆえ、普段は我々の眼に留まり難い。「日常性」における所謂「ダス・マン」の「頹落」もそれへの視線を遮ってしまう。しかし、我々がそれを見ようが見まいが、我々人間の頭の天辺から足の先まで神秘でないものは何一つないのである。最新の最高度の科学技術でも決して真似ることの出来ない程の緻密な人体組織、そしてそれらの絶妙な諸機能、それらもすべて人間の存在である。その存在のお陰で、我々は見たり、聞いたり、食べたりもする。寝たり起きたりもする。覚えたり忘れたりもする。そうなるようになっている！ それだけでもない。実に妙なことに、人間には男と女、二種類があって、互いに向き合って相手を求め合うようにならしめられている。それを我々は「愛」とも呼ぶ。それはやがて肉体的結合、そして生殖へと繋がる。そのようにして新しい人間がこの存在界に参加してくる。生まれたその新しい人間もまた女か男、そのどちらかになる。彼らもまた人間として、生き、老い、病み、そして死ぬ。その過程で彼らは、喜んだり、怒ったり、愛したり、楽しんだりもする。憎んだり戦ったりもする。勝ったり負けたりもする。欲したり諦めたりもする、成功したり失敗したりもする、働いたり遊んだりもする。建設したり居住したり思惟したりもする。また、講演をしたり聞いたりもする。論文を書いたり読んだりもする。生老病死、喜怒哀楽、衣食住。避けられない定めである。そうするように、そうなるように、なっている！ そうなっているということ、それもまた、人間の存在に違いあるまい。「世界内存在」とか、「気遣い」とか、「死への存在」とか、「先駆的決意」とかいったハイデガーの諸概念も実はその中の一部を見せてくれるものにほかならなかった。

6) [自然の存在]：さて、動物たちや植物たちは如何なものか。蚕(カイコ)は桑の葉の上を這うようになっており、蜂と蝶は、花を求めて飛ぶようになっており、さんまとさばは、海で水をかき分けるようになっている。(カイコと桑、蝶と花、さんまと水と言った根源的結合ないし相互性／相関性はこれまた、神秘的存在と言わねばならない。よろよろ飛びながらもちやんと花に安着する蝶の飛行を考えてみよ！) また、タンポポは、短い茎に黄色い花を咲かせ、また白い種を風に飛ばすようになっており、林檎は、赤くて甘い実を結ぶようになっている。水は上から下へと流れるが、0度になったら凍りつき、100度になったら沸き上がる。水は火を消し、火は木を燃やし、油は水に浮かぶ。そうなるようになっている。ああ、これもまた神秘の存在！

ありとあらゆるものがかくの如し！ 驚異の存在はそのように、あらゆる存在者の「あること」と「そうであること」の中に宿っている。そのようにして春が来、花が咲き、蝶が飛ぶ。雨が降り、雪が降る。楓は紅葉し、落ち葉が落ちる。…そのすべての現象の中に偉大なる存在が宿っている。息づいている。

このような話をまともに展開するためには、私だって100巻くらいの全集が必要かも知

---

にほかならなかった。

れない。数年前に出した『本然の現象学』<sup>13</sup>もその一環であった。勿論それはあまりにも素朴なものである。しかし、量が必ずしも質を反映するものではない<sup>14</sup>。一つの単語が万物万事を凝縮することもある。「存在」こそはまさにそのようなものなのである。「存在」！ まさにそれを、既にあの昔パルメニデスも語ってくれたのであり、ハイデガーも語ってくれたのである。「ある、ということ、無ではない、ということ」、「かくかくしかじかである、ということ、ああではなくこうである、ということ」、ああ、このなんとすごい発言なのか！ 彼らはまさに「これ」を見ていたのである。その存在が、今も、現に、我々のすぐそばに、そこここに、いな、我々の中にも外にも、上にも下にも、前にも後ろにも、右にも左にも、存在しているのである。毫も変わることなく、まさしくここに！ 我々のこの世界に。

だからこそ、ただそのために、あらゆる存在論の原点に立ち返って、私は言いたいのである。我が物にするために、あえて自分の言語で。「ある！ そして、かくのごとくある！ こうなるようになっている！ ほら、このように！ このすべてが！」

Sujeong Lee  
*Eine Aneignung der Ontologie*

---

<sup>13</sup> 李洙正『本然の現象学』ソウル、センガゲナム出版社、2011年。

<sup>14</sup> B4一枚に収まるパルメニデスの存在論が、全集100巻に展開されたハイデガーの存在論より劣るとは言えないはずである。短い「般若心経」に仏陀の膨大な教えが凝縮されていることも、似たような場合である。「フォアゾクラティカーの断片集」、孔子の教えを収めた「論語」、イエスの教えを収めた「新約聖書」も量が必ずしも質の条件ではないことを証明している。